



AJEL

日本ラテンアメリカ学会

会 報

2004年 3月1日



AJEL

No. 83

1. 理事会報告
2. 第 25 回定期大会発表者再募集
3. 理事選挙日程のお知らせ
4. 研究部会報告
5. 研究部会開催案内
6. 近著紹介
7. 事務局から
8. 編集後記

1. 理事会報告

第105回日本ラテンアメリカ学会理事会

日 時：2004年 2月14日(土)13：30～15：40

場 所：上智大学10号館415室

出席者：今井圭子（理事長）、松下洋、小泉潤二、後藤政子、乗浩子、大串和雄、小池洋一、堀坂浩太郎（書記）

欠席者：山田睦男、三田千代子、二村久則、狐崎知己

<報告事項>

- (1) 第25回定期大会（6月5～6日、同志社大学）の準備状況について、研究報告申し込み数が少なく、引き続き報告者を募るための広報を行うとの報告があった。
- (2) 次期理事選出のための選挙管理委員会による被選挙人名簿作成状況および投票までのスケジュールについて報告があった。
- (3) 会員名簿作成状況についてアンケート回収率が高く、順調に作成作業が進んでいる旨の報告があった。
- (4) 年報の編集状況、原稿応募、査読方法などについて報告があった。
- (5) 会報につき、3月1日号の編集作業を進めている旨報告があった。

<審議事項>

- (1) 理事長経験者の被選挙権について審議し、継続審議案件とした。
- (2) 年報の編集について審議し、査読フォーム等の立案を現編集委員会に依頼することとした。
- (3) リオデジャネイロ州立大学日伯プログラムからの日本研究専門家ダイレクター作成協力依頼について理事長に取り扱いを一任した。
- (4) 入会者6名（前田美千代、大澤武志、長山浩章、本間芳江、塚本剛志、David Colmenares）、退会者2名（Gustavo Andrade、福地崇生）を承認した。

2. 第 25 回定期大会発表者再募集

2004年度のラテンアメリカ学会定期大会は6月5日（土）、6日（日）に同志社大学今出川キャンパスで行います。

発表の申し込みは4月10日（必着）までに、氏名、所属、パネル・個人発表の別、発表テーマを明記の上、以下にお願いします。また、パワーポイント、ビデオ、スライドなどの機器をご使用予定の場合は、その由をお知らせください。（なるべく、e-mailで送付してください。）

第25回日本ラテンアメリカ学会準備委員会
同志社大学松久玲子研究室気付

e-mail：rmatsubi@mail.doshisha.ac.jp

郵送：〒610-0394 京田辺市多々羅都谷
同志社大学 言語文化教育研究センター
松久玲子研究室気付

Fax 0774-65-7069

なお、シンポジウムのテーマは、「ネオリベラリズムを越えてーラテンアメリカにおける新しい戦略ー」の予定です。

また、以下のテーマでパネル及び分科会を設ける予定です。分科会で発表を希望される方は、1-5まではそれぞれの分科会責任者まで、また、6-10については上記準備委員会まで御連絡ください。

予定パネル

- ① マヤ・イメージの形成と消費
- ② ラテンアメリカ女性の社会イメージの源泉
- ③ 文 学

分科会またはパネル

1. ベネズエラのチャビスモと新型のポピュリズム El Chavismo de Venezuela y otras formas de neopopulismo (moderador 二村久則: futamura@gsid.nagoya-u.ac.jp)
2. ジェンダーと社会的動因 Genero y nuevos actores sociales (moderadora 松久玲子: rmatuhi@mail.doshisha.ac.jp)
3. メキシコと日本の経済関係 Relaciones económicas entre México y Japón, con ampliación posible a otros países latinoamericanos (moderador 安原毅: tyahara@i-bm.net)
4. ラテンアメリカにおける新宗教 Nuevas religiones en América Latina (moderadora 乗浩子: ht.yotsunoya@nifty.com)
5. マイノリティと教育 Minorías nacionales y educación (moderador 牛田千鶴: ushida@suzuka-iu.ac.jp)
6. ブラジル Brasil
7. ペルー Perú, política e historia
8. ラテンアメリカの政治思想、変化と継続 Cambio y permanencia en el pensamiento latinoamericano)
9. キューバ Cuba
10. アンデス地域の先住民運動 (Movimientos indigenistas, enfocados sobre en Ecuador, Bolivia y Perú)

4. 研究部会報告

《東日本部会》

ラテンアメリカ学会東日本部会は2003年11月15日(土)、慶應義塾大学三田キャンパスにおいて開催された。部会の共通テーマを「中米研究」とし、社会学・歴史学・医療人類学・開発経済学(農業)の立場から中米を研究する四名の若手研究者の方々に発表していただいた。

- 1・上智大学大学院 藤井嘉祥氏「雇用戦略の変化にみるマキラドーラの現状—グアテマラの事例より—」

藤井氏はグアテマラにおいて1990年以降、都市部から農村部へと拡大しつつあるマキラドーラの動向とその極めて現代的な経済システムが先住民村落社会にもたらす社会経済的影響に関心を抱いている。現地調査で得られたデータをもとに農村部のマキラドーラの特徴を考察し、1) 農村部のマキラ労働者が「スペイン語」に精通した若年層である傾向が高い点、2) マキラ側が労働者の村落内でのネットワークを巧みに利用しながら労働力を確保する一方、労働者側もマキラでの「労働経験」を重視し、それを売り込みことでより条件のよい雇用環境を得ている点を明らかにした。

- 2・京都外国語大学大学院 村田真喜子氏「グアテマラ産の藍の重要性に関する一考察—世界市場におけるインディゴブーム(1750—1810)を中心に—」

村田氏は植民地時代に中米の主要な輸出産品であった藍(インディゴ)の商業的役割に着目し、西・英・仏・蘭4国の藍をめぐる競合とその歴史的背景に触れながら、グアテマラでの藍生産の開始とその拡大、またそれが当時の世界経済に

3. 理事選挙日程のお知らせ

- 次期(2004~2006年)理事選挙が次の日程で行われます。
- ・投票用紙および被選挙人名簿の交付(郵送): 4月13日(火)前後
 - ・投票期間: 4月15日(木)~4月30日(金)予定

郵送による投票です。選挙権者は2004年1月末現在の会費完納者です。上記日程において投票用紙が届かない、または名簿に誤りがあるなどの不備がありましたら、選挙管理委員長の幡谷則子会員まで至急ご連絡下さい。

どのような影響を与えたのかを、歴史家の記述や Archivo General de Centroamérica の古文書資料をもとに検証し、藍産業の発達と商業化の経緯、その商業ルートの実態を明らかにした。

- 3・お茶の水女子大学大学院 茅根美保氏「病気治療における『呪術性』の認識ーコスタリカ先住民ブリブリと Buenos Aires 地区に移住する『白人』を事例としてー」

茅根氏は、民俗的身体観にもとづき、患者の「症状」に合わせた薬用植物を配合し「病い」を治す先住民ブリブリの治療体系と、国家が推進するヘルスケアシステムークリニックでおこなわれる近代的な医療体系との違いを比較し、先住民ブリブリとヨーロッパ移民の子孫（白人）とのあいだに生じる軋轢とその原因を『治療にみられる呪術性』という視座から考察した。その結果、双方ともに「自分たちが理解できない、積極的に理解しようとはしない治療方法」を総じて『呪術的』なものと認識していること、またそうした思考体系こそが双方の対立を生む原因となっている点を指摘した。

- 4・立教大学非常勤講師 木下雅夫氏「グローバル化とホンジュラスの小農民」

木下氏はグローバル化がローカルな社会にもたらす様々な影響を「農民」というミクロな視点から捉えるためのケーススタディとして、遺伝子組み換え (GMO) とうもろこしの生産がホンジュラスの小農民に与える影響について分析した。その可能性とは、1) GMO 作物生産を背景とした多国籍アグリビジネスの台頭を受け小農民が GMO 作物生産へと移行することで、企業による大規模な農業生産との経済格差がさらに増大すること、あるいは、2) GMO 作物の進出とは対照的に、従来の伝統種作物と小農民の「有機農業」が再評価され、小農民たちの農業生産における経済的脆弱性が緩和されることの2点である。GMO 作物が今後のラ米農業や経済に与える影響は多大であることが予想され、他のラ米

諸国との比較研究が早急な課題となる。
(文責：本谷 裕子)

《中部日本部会》

12月13日(土)14時から17時30分にかけて南山大学L棟会議室にて開催された。出席者は24名。今回は報告2本であったため時間を十分にとり、各報告者にそれぞれ発表1時間と質疑応答30分をお願いした。

第一報告は、「家族を通してみる在日ペルー人の生活」である。報告者は姓名が示すとおり日系ペルー人であり、発表はスペイン語で行った。デカセギ体験を含む長い滞日生活を通じ、様々なペルー人家庭と交流のある報告者自身、ある意味で同時に当事者でもある。単に研究者としてフィールドワークを行ったのでは分からないペルー人コミュニティ内部の微妙な問題を明らかにしようとした。

第二報告は、インディヘニスモ文学の特徴を歴史的に回顧するとともに、その代表的作品において見出しうる現代的意義について再評価を試みたものである。1957年に発表された作品を構成する支配・従属・他者など古典的あるいは図式的概念は、それらを直接21世紀初頭の現実に適用する妥当性に難があるとしても、作品の記述自体は今日の問題を提起し続ける。このことはまた、ラテンアメリカ社会の諸問題の根本が未だ解消していないことを意味しているともいえる。なお、報告者は同小説の翻訳を2002年秋に刊行している。

今回は報告の一つがスペイン語でなされたこともあり、メキシコやパナマなどスペイン語圏からの出席者も数名あった。中部部会単位において複数言語による開催が可能であることを実証できたことは一つの成果であった。また、このたび研究会活動について広報に力を入れた結果、多数の会員外の出席者があり、中部地域におけるラテンアメリカ研究に対する関心の高さと研究者の層の厚さをあらためて認識することができた。

さらに質疑応答も、時には新人への愛の鞭ともいえる厳しい指摘がなされるなど、いずれも司会者が直前になって通常よりかなり長い担当時間を報告者をお願いしたにもかかわらず

らず、緊張感すら伴う活発なものであり、多数の出席者ととも極めて充実した部会であった。(文責 水戸博之)

報告者による要旨は以下の通りである。

Los Peruanos y sus Familias en Japón
Rolando Requena Minami
(Universidad de Nagoya)

Desde 1986, año en que llegaron los primeros inmigrantes peruanos a Japón, se han presentado cambios al interior de la familia migrante peruana como parte del proceso de adaptación a la sociedad y cultura japonesa. El siguiente es una breve sinopsis de los resultados de una investigación que se realizó de 1999 a 2001, entre 78 peruanos residentes en Japón, con el objetivo de conocer y verificar los cambios que se han dado al interior de sus familias así como en su vida diaria.

Entre los principales cambios observados se puede mencionar la "flexibilización" de las relaciones íntimas. Por ejemplo, se ha notado una tendencia a aceptar las relaciones prematrimoniales y la convivencia como algo natural y necesario para poder conformar una familia.

Otro tema que merece atención es el del aborto que es completamente rechazado por los migrantes, a pesar de que en Japón sea legalmente aceptado. Las relaciones extramatrimoniales, aunque son vistas como algo negativo, son aceptadas como una consecuencia directa de la separación física de la familia debida a la migración.

Por otro lado, en relación a este tema, se ha comprobado la persistencia de un doble estándar para los hombres y mujeres. Las relaciones prematrimoniales o extramatrimoniales de los varones no son juzgadas tan fuerte o negativamente como aquellas realizadas por las mujeres.

También dentro de la comunidad migrante hay un fortalecimiento de la llamada "familia nuclear", pero al mismo tiempo se mantienen

las relaciones con otros parientes en Perú u otros países a través del envío de remesas periódicas. Finalmente, el número de hijos que los migrantes tienen es relativamente bajo, esto se debe principalmente al arduo proceso de adaptación a un medio tan diferente como es la sociedad japonesa.

『バルン・カナン』再読—ポストコロニアルの視点から—

田中敬一 (愛知県立大学)

ラテンアメリカの文学作品をポストコロニアルの視点から読み直す作業は、植民地時代を通して形成された負の遺産を浮き彫りにし、被征服者の声なき声をすくい取る作業でもある。本報告ではメキシコの小説『バルン・カナン』を取りあげ、作品に植民地的体験がどのように反映されているか考察した。

『バルン・カナン』の物語世界において、ラディーノとインディオの支配・従属の関係は根強く残っており、それはインディオを「他者」として排除し、搾取の対象としてきた植民地時代の身分制社会に起因していた。また記述面でよく見られるインディオ起源の語彙は、支配者の言語に対する土着の文化の干渉である。そしてラディーノ社会に取り入れられた先住民の伝説や生活習慣は、もはや両者の文化的境界は曖昧であることを示している。そしてこの文化的異種混交性(heterogeneidad)、あるいは交雑性(hibridez)こそが、複雑なチアパス社会を特徴付けるものとなっている。

《西日本部会》

2003年12月6日(土)、午後2時—5時
(於) 神戸大学

最初に、リオデジャネイロ連邦大学の Jorge Chami Batista 教授(専門は貿易論、2000年10月—12月に神戸大学経済経営研究所で客員研究員として滞日)による「最近のブラジル経済とルラ政権の政策」に関する報告があった。同教授は、1980年代のブラジル経済の平均成長率が、チリを下回ったものの、アルゼンチン、メキシコを凌駕していたこと、90年代には4カ国で最低ではあったが、1980—

2000年を通じた経済パフォーマンスは決して悪くなかったと総括した。また、90年代のインフレ収束にはリアルプランの成功とともに貿易自由化に伴う、供給の増大と輸入価格の下落が貢献していたとした。2003年1月に大統領に就任したルラの経済政策は、選挙キャンペーン時における新自由主義批判をトーンダウンさせ、むしろ前政権と大差ない新自由主義路線を歩んでいるが、これには与党労働党の経済学者が経済政策決定過程から事実上排除されていることが大きいという。今後のブラジル経済の見通しに関しては、楽観的だった。リアル・プランとカバロ・プランとの異同に関する解釈をはじめとして、多くの問題をめぐって活発な質疑応答が交わされた。

続いて、武田由紀子会員（神戸市外大院生：文化人類学）による「相続と老い—メキシコ・ベラクルス州南部における事例から—」と題する報告があった。

要旨（同会員による）は以下の通り。

今日のメキシコ農村の経済構造の変動は、農村からの出稼ぎ人口を促し、家族の拡散傾向を引き起こしている。一方、農村においても高齢化が進展しており、社会的保障を事実上当てにできない農村の年長世代にとっては老後の経済的保障の確保がより深刻な問題となりつつある。本研究では家産の相続を、子供や孫による経済的援助やケア・サポートを確保するための世代間交渉の媒体にとらえ、ベラクルス州ウスパナパ地区での調査をもとに、相続をめぐっての世代間の衝突・合意確立の事例を示した。相続決定（誰に、いつ、何を譲るか）、またそうした選択が年少世代にどのように示唆されるかという相続のプロセスには、年長世代にとっての老後の生活保障という動機のほかに様々な要因が介入する。末子相続の規範、個別の家族の事情、マチスモの伝統、家父長的な父・息子関係といった文化的プロトタイプ、さらにローカル社会への参加欲求を指摘することもできる。

報告後、婚姻という要素も「相続と老い」の問題と関連して重要ではないかといった質問をはじめとして、質問が相次いだ。なお、武田会員には、急遽スペイン語での報告をお願いし、見事にこなしてくれたことに謝意を

表したい（文責、松下 洋）。

5 研究部会開催案内

○ 東日本部会

日時 3月27日（土）午後2時から

場所 上智大学

修士論文の発表会の形をとります。希望者は上智大学イベロアメリカ研究所までお申し込みください。

また、具体的な開催場所、報告内容など、詳細については決定次第、会員にメールで連絡します。

○ 中部部会

日時 3月27日（土）午後2:00-5:30

会場 名古屋大学 大学院 国際開発研究科 8F

第一会議室

報告者、報告課題は未定です。

発表希望者は田中敬一会員または水戸博之会員へご連絡ください。詳細が決定しだい、メールで連絡します。

○ 西日本部会

未定。詳細が決定次第、会員にメールで連絡します。

学会センターへの問い合わせ

住所変更・異動のご連絡および会費納入に関するお問い合わせは直接、日本学会事務センターまでお願いします。

(財) 日本学会事務センター大阪事務所気付

日本ラテンアメリカ学会担当

中倉加奈子

〒560-0082

豊中市新千里東町1-5-3

千里朝日阪急ビル13階

(Tel) 06-6873-2780

(Fax) 06-6873-2750

受付時間 9:30-5:30（土日休み）

☆なお、住所、電話番号が変更になりました。

6. 近著紹介

小倉英敏『アンデスからの暁光——マリアテギ論集——』

現代企画室、2002年、281ページ

紹介者：後藤雄介（早稲田大学）

ラテンアメリカ近現代の一思想家を単独で取り上げて分析した日本語による本格的な研究書がかつて存在しただろうか。答えはじつに否であろう。ペルーのホセ・カルロス・マリアテギ（1894-1930）の思想の全体像に迫った本書は、その最初の一步を記す作品であるといってもさしつかえない。

マリアテギは一般に「独創的なマルクス主義者」として知られる。著者とマリアテギとの最初の接点も、世代적におそらくマルクス主義を通じてのものであったことは想像に難くない。しかしながら、本書を著すにあたっての著者の問題関心はすぐれて現代的でもある。それは、一方で今日文字通り世界を席卷するグローバル化の現象であり、他方ではポストモダン状況下における文化の行方である。こうした二つの関心に対応させるがごとく、〈全体性〉と〈共生〉とがマリアテギの思想を貫くものとして位置づけられている。

本書は三部構成からなる。第一部「先行諸世代との思想的交差」は、マリアテギのマルクス主義を特徴づける「精神主義」が先行世代との思想的格闘の所産であることを明らかにする。第二部「思想形成の軌跡」では、社会主義への最初の傾倒、ヨーロッパ亡命時代、雑誌『アマウタ』の刊行、コミンテルンとの論争から死去までの四期に時代を区分し、マリアテギの思想の展開をたどっている。第三部「思想論」においては、マリアテギの思想が今度は各テーマ（国民形成、近代性、経済的従属）に則して論じられている。

もとより評者は、本書のすべてを論評するだけの能力を持たない。ここでは本書の通底音をなす〈全体性〉と〈共生〉の思想に絞り、とりわけ後者については、その問題点にも若干踏み込んでみたい。

著者によれば、マリアテギの〈全体性〉の思想とは、「単に人々の肉体的、経済的状态の悪

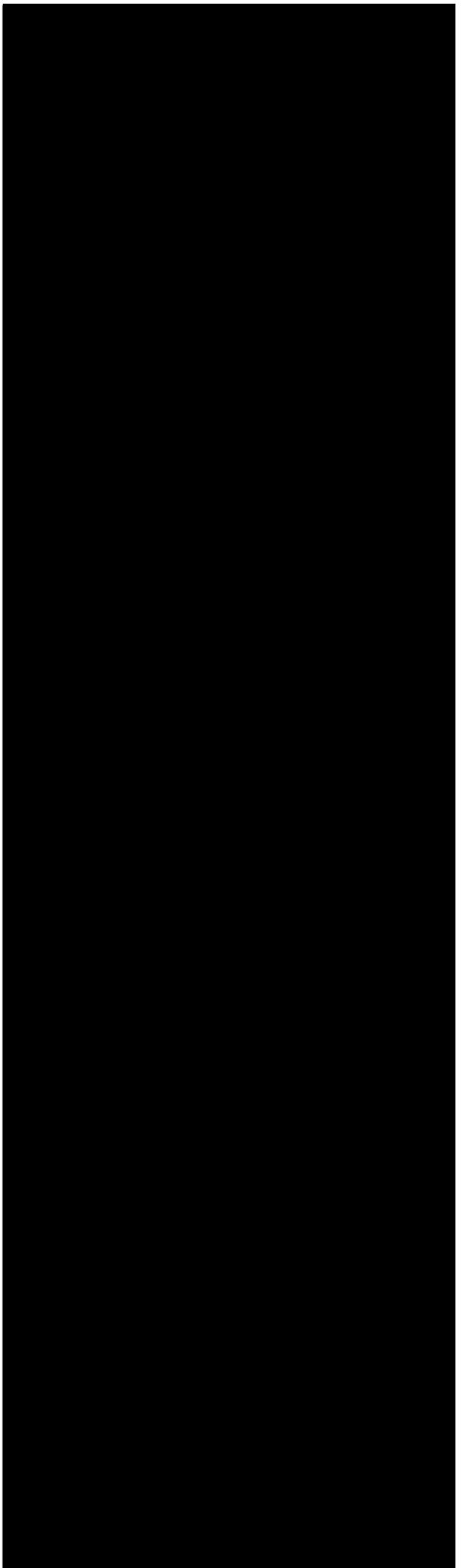
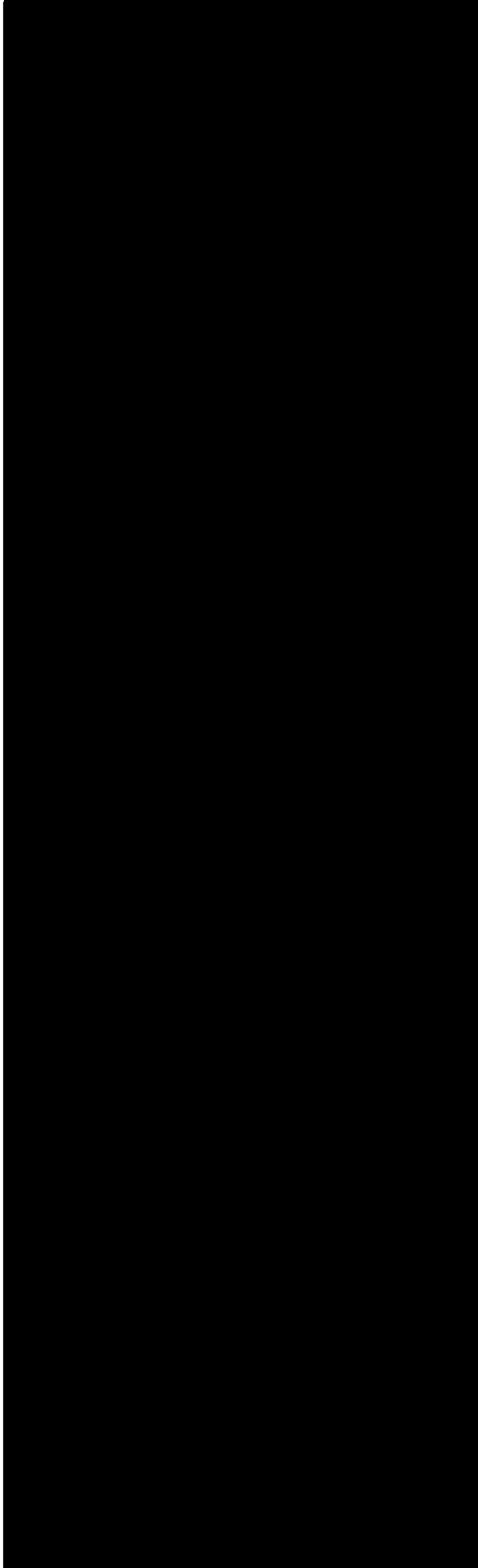
化のみを变革の対象とするのではなく、社会的、文化的状況の全体を主題とするとの視点」、より具体的には、「社会变革の対象を政治・経済制度に限定せず、社会的状況と文化に規定される個人の意識や日常生活にも拡大しようとする視点」である（21ページ）。これがいわゆる下部構造と上部構造の有機的連関以上のなにかを物語っているかどうかは評者には判断しがたいが、マリアテギのテキストから具体的に浮かび上がらせようとしたことのメリットは大きい。

一方、〈共生〉の思想とは、「文化や価値観の多様性を認めようとする多元主義の思想」であり、「マリアテギはグローバル化の進展によって人種と文化の混成化が進み、文化とアイデンティティを個々に対応させてゆくのでは捉えられない事態が広がることを予見」していたと著者は述べている（187ページ）。ゆえに、マリアテギの「国民」理念は「統合論」とも「人種差別」とも無縁であったとされる。じつはこの主張こそ、本書の最大の見せ場であると同時に、もっともきわどい部分でもある。著者は、「メスティソ、黒人、中国系に対する否定的な見方」等、マリアテギには「論理的整合性に欠ける面があることは否定できない」と述べているにもかかわらず、「そこには決して矛盾は存在しない」と結んでしまうのだが（188ページ）、論証がないため説得力に乏しく、「はじめに結論ありき」の印象を免れない。その点では、崎山政毅の批判的な理解のほうが参考になる（『マリアテギ・ニーチェ・コミンテルン』『思想』919,920号）。

このように、問題点は少なからずあるものの、そのことは本書の先駆的価値をいささかも貶めるものではない。本書はこれから同様の取り組みを目指す者を励ます、まさに「暁光」でもある。日本におけるラテンアメリカ思想史研究の地平がさらに明るみを増すのはこれからである。

7. 事務局から

I. 会員関係 (a b c 順)



II. 寄贈図書

- 上智大学イペロアメリカ研究所『イペロアメリカ研究』第25巻第1、2号（2003年前・後期）
- 山本純一『メキシコから世界が見える』集英社、2004年
- 横山和加子『メキシコ先住民社会と教会建築－植民地期タラスコ地域の村落から－』慶應義塾大学出版会、2004年

編集後記

とくに斬新な企画も思い至らないまま、会報の編集担当も今回で最後となりました。報告の執筆等、無理なお願いに対しても快くお引き受けいただき、ありがとうございました。

4月には新理事の選挙があります。できるだけ多くの会員の投票をお願いいたします。

（後藤政子）

No.83

2004年3月1日発行

学会事務局

〒102-8554

東京都千代田区紀尾井町7-1

上智大学イペロアメリカ研究所

日本ラテンアメリカ学会事務局

TEL 03-3238-3530・3535

FAX 03-3238-3229

E-mail: m-matsu@sophia.ac.jp

事務担当理事：堀坂浩太郎

秘 書：松丸美佐子